



文部科学省私立大学  
戦略的研究基盤形成  
支援事業採択

今年もとうとう年度末が押し寄せて来ています。

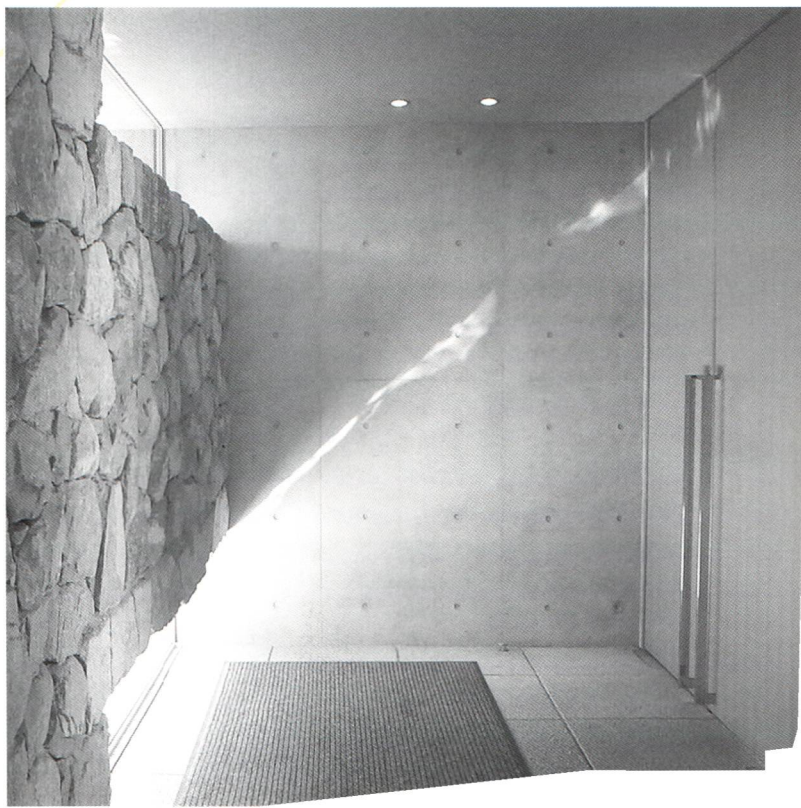
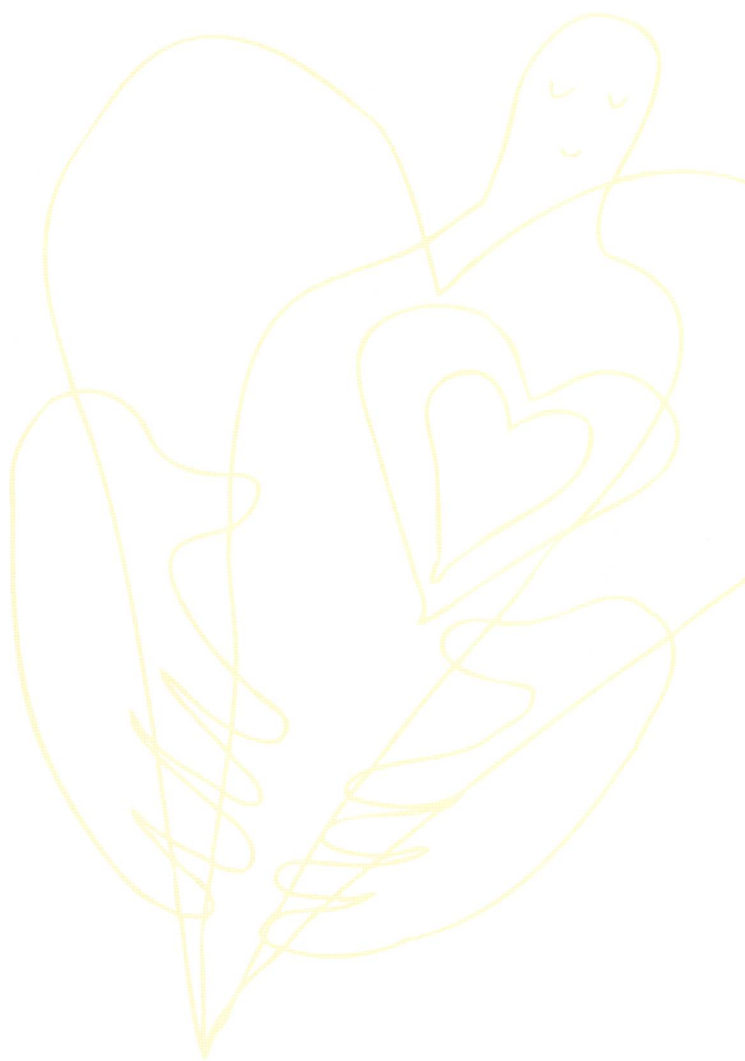
研究所では、現在4つのプロジェクトが同時並行で進んでいます。また、来年度には叢書を出版する予定です。

研究所で行われた研究活動によって得られた知見を皆さまにお届けできるよう、日々頭を悩ませながら、頑張っております。

また、その途中経過の報告である、紀要『心の危機と臨床の知』vol.12も先日発行されました。そちらもご覧いただけたら幸いです。

今回のニュースレターは、研究所で行われた公開研究会の報告を掲載しております。

今年度最終号を、どうぞご味読ください。







プロジェクト3では、2008年度よりアートセラピストを対象とした芸術療法に関するアンケート調査とインタビュー調査を行ってきました。今回の研究会では、これまでのインタビュー調査から見てきたアートセラピーの実態と問題点について、当研究所研究員の石原みどり氏（美学・芸術学）と宮川貴美子氏（臨床心理学）にご報告いただきました。

インタビュー調査の分析で明らかになった多くのことを踏まえ、石原氏はとりわけ以下の2つの点を強調されました。

①アートセラピーは「対象者」も「内容」も「形式」も「レベル」も多様

②アートセラピーでは芸術的な質は問わない／作品は鑑賞しない

⇒作品はシェアするものであり、「ラポール（信頼関係）」が重要なかでも、「質（クオリティー）」の問題に注目した石原氏は、アートセラピーでの「質」と芸術作品における「質」の違いについて言及されました。アートセラピーという「質」とは、クライアントの表情や態度などの「様子」がよくなること、あるいはセッションを通して共同体として「繋がる」感覚が芽生えることを指しますが、一方の芸術学では作品内部の構造、美的要素が問題とされるのです。次に、アートセラピーの特長として、セッションによって創作された作品そのものではなく、クライアントとセラピストとの「ラポール（信頼関係）」が重要視されることが指摘されました。また、アートセラピーの効果可視化することの困難さ、なぜ「アート」セラピーかという問題、そして日本でのアートセラピーを取り巻く問題点、課題、将来的な展望についてもお話しくさしました。

次に宮川氏は、臨床心理学の観点からインタビュー調査の実態と問題点について考察してくださいました。まず、臨床心理士という立場からすると、芸術療法の基礎は心理療法が前提となっていることが指摘されました。とりわけ臨床心理の現場に取り入れられた箱庭やコラージュ療法は、「型」という決まった枠組みのなかでセラピストに見守られて行うことが重要であることが示されました。一方で、アートセラピストの多くは芸術活動から出発した人もいれば、心理療法からはじめたひともいます。そのため、アートセラピーは自由なセッションの仕方を可能にしますが、「型」がないことで危険な状況に陥ることもあり得るということです。つまり、宮川氏が強く主張されたことは、アートセラピーは、セッションが悪い方向に向かわないためにもクライアントとセラピストの関係性がより重要になってくるのではないかということです。最後に、今後展望として、アートセラピーによって生じ得る危険性についてアートセラピストがどのような対策を取っているのかさらなる調査が必要であると言及されました。

質疑応答では、以下の内容について議論がなされました。

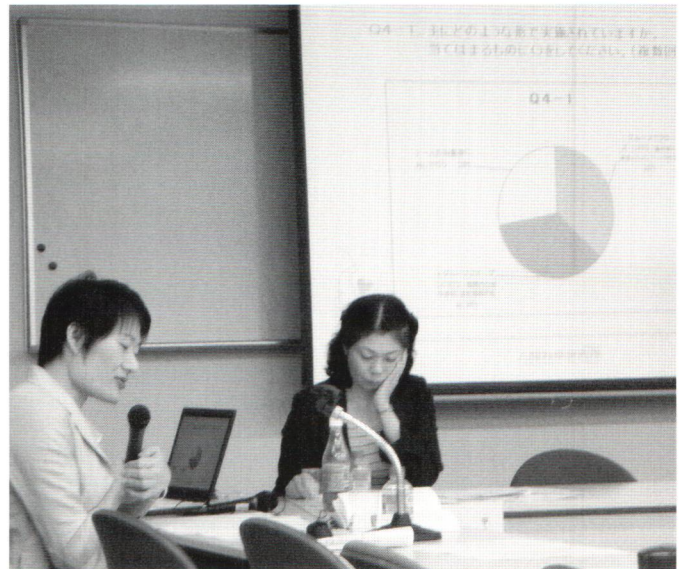
1. クライアントとセラピストとのラポール（関係性）についてどのような判断基準があるのか
2. アートセラピーは治療法としてどのような効果があるのか
3. 芸術療法と芸術学の定義付けについて

これらの議論を受け、来年度9月開催の公開シンポジウムでは芸術学や芸術療法などの領域でご活躍の先生方をお招きし、さらなる議論を展開していきたいと考えております。どうぞご期待ください。

## 第54回公開研究会 「芸術療法と芸術学の対話」

### 第3回 アートセラピストに聞く

—11のインタビューから見える芸術療法の諸相、芸術学との距離—



日 時：2010年10月2日(土) 14:00～18:00

会 場：甲南大学 18号館3階 講演室

講演者：石原みどり（愛知産業大学非常勤講師／美学・芸術学）

宮川貴美子（甲南大学文学部非常勤講師／臨床心理学）



## 第55回公開研究会 「イクメン」の向こう側へ

—臨床心理士による父親への育児支援の可能性—



日時：2010年12月10日(土) 18:00～20:00  
会場：甲南大学 18号館3階 講演室  
講演者：菅野 信夫 (天理大学大学院／臨床心理学)  
企画：高石 恭子 (甲南大学／臨床心理学・学生相談)

プロジェクト2では、2008年より父親の子育てに関する研究を進めており、今年度は東灘区の子育て支援課と公立保育所、私立保育園、公立幼稚園によるご協力の下、父親の子育てに関する調査を実施しました。昨年7月の公開シンポジウムにて結果の一部を報告し、今年度末には報告書として研究成果をまとめる予定にしております。

今回の研究会では、臨床心理士でキンダーカウンセラーとしても活躍の菅野信夫氏(天理大学大学院)をお招きし、父親の子育てに対する臨床心理的支援の可能性についてご講演いただきました。質疑応答では、菅野氏自身の子育て談や臨床実践、フィンランドやニュージーランドの子育ての状況、当研究所の調査で明らかになってきた父親の子育ての現状をふまえつつ、現代日本の父親が必要とする育児支援のあり方とは何かについて活発な議論が交わされました。

近年「イクメン」という言葉が流行り、子育てに参加することが格好い男性の条件だともいうかのような風潮さえあります。そのような流れを受けて男性も育児休暇を取れるようにはなったものの、取得率は1パーセント強と非常に低いままです。その原因として、育児休暇取得中は無給であることや、会社等で男性が長期休暇を取れるような体制作りがなされていないことなど、制度(ハード)面での不備がまず挙げられ、「育児をしたいけれどもなかなかできない」という父親の声も様々な調査から聞こえてきています。しかし、夫達のような主張に対して、妻達の声は厳しいものです。ある雑誌の調査によれば、共働きで30代のキャリアウーマン200人を対象に調査を行ったところ、夫が育児をできるかどうかに影響するものとして、「職場の制度」を挙げた人は10%に満たず、およそ70%の妻達が「本人(夫)のやる気」と回答したのだと言います。妻達は制度(ハード)面だけではなく、夫達が本気で子育てをする気があるのかという、心理(ソフト)面にこそその大きな原因があると考えているのです。

菅野氏はハード・ソフト両面で男性の子育てを支えていくことが大事であるとし、「育児休暇を取得することは、あくまでも一つの選択肢。取っても取らなくてもどちらでもいいと思っている。それを夫婦がどう話し合うかが大切で、要は、夫婦の関係性」だから、「物理的支援は必要条件だが、十分条件ではない」と言います。「本来妻がやるべき子どもの世話を手伝ってあげる」という子育て参加では、結局、夫には育児をする、しないという選択肢があるけれど、妻には子育てがあって、やりたかったら仕事をしてもいいという選択肢しかありません。夫婦の関係性の中でお互いが納得できるバランスを作っていく過程、つまり、体の機能も持てる選択肢も異なる夫と妻が、お互いの気持ち想像しあい、共感しあえる関係を築いていく過程、さらにはいえば、父親の中にある母性、母親の中にある父性が育っていく過程を支えることが、臨床心理士が担いうるソフト面での子育て支援だと言えるかもしれません。



## これまでの活動

### 公開研究会

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

#### 第56回 公開研究会

「芸術療法と芸術学の対話」

##### 第4回 カタルシスの系譜

開催日：2010年12月17日(土)

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

講師：港道 隆 (甲南大学/哲学)

プロジェクト1. 加害-被害関係の多角的研究—和解と赦し

#### 第57回 公開研究会

「人間天皇の象徴——天皇制の危機とゆらぐジェンダー——」

開催日：2011年3月5日(土) 14:00～17:00

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

講師：金 富子 (東京外国語大学/ジェンダー論・ジェンダー史、朝鮮教育史、日韓社会文化論)

企画：港道 隆 (甲南大学/哲学)

プロジェクト3. 芸術学と芸術療法の共有基盤確立に向けた学際的研究

#### 第58回 公開研究会

「芸術療法と芸術学の対話」

##### 第5回 芸術療法をめぐる文化、歴史、医療

開催日：2011年3月7日(月) 13:30～18:30

2011年3月8日(火) 11:00～16:30

講師：今井 真理 (四天王寺大学講師/芸術療法)

小林 昌廣 (情報科学芸術大学院大学/身体表現研究)

西 欣也 (甲南大学/文学・芸術理論)

服部 正 (兵庫県立美術館/芸術学、アウトサイダー・アート研究)

安齊 順子 (城西大学/臨床心理学)

三脇 康生 (仁愛大学/精神医学・芸術批評)

司会：川田都樹子 (甲南大学/芸術学)

プロジェクト2. 育てる関係の危機と子育て意識の多相性についての研究

#### 第59回公開研究会

「関係をみること、関係を支援すること」

開催日：2011年3月13日(日) 13:30～16:00

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

講師：小林 隆児 (大正大学/乳幼児精神医学、児童青年精神医学、関係発達臨床学)

企画・司会：高石 恭子 (甲南大学/臨床心理学)

### 研修会

#### 第3回 思春期発達支援研修会

「発達障がいをもつ人々への医療と支援」

開催日：2010年12月3日(金)

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

講師：田中 究 (神戸大学/臨床心理学)

企画：森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)

南野 美穂 (甲南大学/臨床心理学)

#### 第8回 心理臨床ワークショップ

「人生史を語るトラウマ治療—ナラティブ・エクスプロージャー・セラピーを学ぶ」

開催日：2011年2月27日(日) 10:00～17:00

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

企画・講師：森 茂起 (甲南大学/臨床心理学)

## これからの活動

### 公開研究会

プロジェクト4. 心理療法の現在に関する検証—臨床と研究の即応的関係の構築—

#### 第60回公開研究会 「抑うつを見分ける」

開催日：2011年3月16日(水) 18:00～20:00

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

講師：横山 知行 (新潟大学/精神医学、臨床心理学)

※参加費無料・参加申込不要

プロジェクト1. 加害-被害関係の多角的研究—和解と赦し—

#### 第61回 公開研究会 「模倣と和解」

開催日：2011年3月23日(水) 16:30～18:30

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

講師：港道 隆 (甲南大学/哲学)

※参加費無料・参加申込不要

### 研修会

#### 第2回 KIHS アートセラピーワークショップ

「認知症ケアのためのアート2 ～和紙を使ったアートセラピーの実践～」

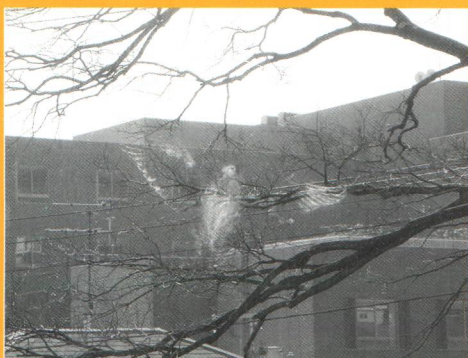
開催日：2011年3月20日(日) 13:00～15:00

場所：甲南大学 18号館3階 講演室

講師：椋田 三佳 (墨彩画家、アートグループ講師)

企画：内藤あかね (甲南大学心理臨床カウンセリングルーム/臨床心理学)

発行年月日：2011年3月15日



## 編集後記

これでもか！というほどに、寒暖の差が激しかった2010年度ももうすぐ終わりです。と同時に2011年度はすぐそこです。そんな変化の慌ただしい様子は、人間界に限らず鳥の世界にも影響しているのでしょうか。

窓にぶつかった鳥の様子を教訓に、私たちの研究活動も「立ち止まること」を意識しつつ、集約の過程に至れるよう進めて行きたいと思います。

今後とも研究所の活動をご期待ください。